

# Glocal Tenri

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.27 No.2 February 2026

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

2

## CONTENTS

### ・巻頭言

構造主義で読む神話  
／井上 昭洋 ..... 1

### ・文脈で読む「身上さとし」(23)

明治 23 年 1 月～3 月  
／深谷 耕治 ..... 2

### ・英語文献にみる天理教 (14)

『Japan To-Day』(1)  
／尾上 貴行 ..... 3

### ・音のちから—中国古代の人と音楽 (30)

文物が語る音の世界—リズムを刻む拍板—

／中 純子 ..... 4

### ・天理参考館から (40)

天理参考館第 100 回企画展「教祖 140 年祭記念 幕末明治の暮らし」①  
／幡鎌 真理 ..... 5

### ・ブラジルの宗教的風景 (10)

アンテペラム期の米国系プロテスタント教会による布教活動④  
／中西 光一 ..... 6

### ・2025 年度公開教学講座：「元の理」の学術的研究とその新しい展開を求めて (8)

第 8 講：「元の理」と「こふき」  
／岡田 正彦 ..... 7

### ・おやさと研究所ニュース ..... 8

第 383 回研究報告会 (12 月 22 日)  
／2025 年度公開教学講座のご案内

## 巻頭言

## 構造主義で読む神話

おやさと研究所長 井上昭洋 Akihiro Inoue

神話についての文化人類学的研究には、伝播主義と構造主義という 2 つの大きなパラダイムがある。そのことは 2025 年 8 月号の巻頭言でも言及し、壮大な人類史レベルで神話の伝播について語る新たな比較神話学の理論について紹介した。ただし、伝播主義のパラダイムに属する神話学は、どんなに目新しい装備 (DNA 解析によるホモ・サピエンスの移動についての理論) を備えても、伝播 (どこからどこへ伝わったのか) という歴史的因果関係で類似性を説明することになる。

一方、レヴィ＝ストロースの構造人類学は、神話の類似性・共通性は人間の思考様式の普遍性 (psychic unity) によるものとし、神話の一つの記号体系として分析し、その構造を明らかにしようとする。よって、伝播論に基づく比較神話学と比べても、単一の神話の精緻な分析に適している。また、分析対象は一つの神話ではなく、複数の神話からなる神話群であり、伝播論的神話学とは異なった方法で神話を比較する。その際に重要になってくるのが、二項対立や変換といった概念だ。二項対立とは、相互に規定し合う対立項目の関係のことである。たとえば「生」は「死」があって初めて意味を持つが、この「生」と「死」が二項対立になる。

もう一つの重要概念である変換とは、登場人物やその役割、出来事の順序を入れ替えても根本的なテーマが保たれる、そうした入れ替え操作を指す。レヴィ＝ストロースのいう (神話の) 構造とは、この変換されても不変である根本的な関係性の枠組みのことである。変換と構造の説明でよく使われる事例が、指の形で勝ち負けを決めるジャンケンだ。最もポピュラーなのはグー・チョキ・パーだが、ジャンケンには様々な種類がある。日本なら古来、虫拳 (蛇・蛙・ナメクジ) や狐拳 (庄屋・狸師・狐) があり、インドネシアのジャンケンなら、象・人・アリを使う。ナメクジの粘液は蛇を弱らせ

るからナメクジの勝ち、狐は庄屋を化かすから狐の勝ち、アリは象の耳の中に入って困らせるからアリの勝ち、というように理由づけはされる。だが、重要なのはそのような表層の語りではなく、要素が置換されても変わることのない三すくみの構造である。こうした様々な種類のジャンケンの集合体が神話群に当たり、個々のジャンケンがその神話群に属する神話と考えればよい。

ところで、昔話や伝説には、人間と人間以外の存在 (動物、精霊、神など) が結婚したり、男女の関係になったりする異類婚姻譚と呼ばれるジャンルがある。浦島太郎、かぐや姫、鶴の恩返し、羽衣伝説などが思い浮かぶだろう。いずれも、人間の男性と異界 (もしくは動物) の女性の出会いと別れについての物語であり、これが異類婚姻譚という神話群の不変の構造になる。そして、それぞれを読み解くとこれらの物語は変換関係にあることが見えてくる。たとえば、亀を助けた浦島太郎は竜宮城に行き乙姫にもてなされるが、望郷の念から人間界に戻ることで、彼女と別れる。罪を犯したかぐや姫は月から人間界に下ろされるが、掟に従って人間界を去ることで、帝と別れることになる。主人公が異界と人間界の境界線を越える理由、異界と現世の位置関係、主人公がもといいた世界に戻る理由など、逆転していることが分かる。

神話を神話素 (「誰が何をした」といった最小の叙述単位) に解体して、神話の構造を読み解くレヴィ＝ストロースの神話分析は、真似をすることができない名人芸だ。だが、彼の神話分析に学ぶ点は多く、構造主義的な視点で神話的テキストにアプローチすることで見えてくることもあるだろう。男神と女神の交わりにより世界や人間が誕生するという創世神話について考えてみるのも面白いかもしれない。『古事記』のイザナギとイザナミによる国産みの物語を分析し、その変換関係にある神話を探していくこともできる。